

森  
鷗  
外

鷄  
独  
身  
二人の友  
小倉日記

北九州市立文学館文庫 7

目次

鶏

独身

二人の友

小倉日記

5

47

69

95

鷄

石田小介<sup>(1)</sup>が少佐参謀になつて小倉<sup>(2)</sup>に着任したのは六月二十四日であつた。<sup>(3)</sup>

徳山と門司との間を交通している蒸汽船から上がったのが午前三時である。地方の軍隊は送迎がなかなか手厚いことを知つていたから、石田はその頃の通常礼装といふのを<sup>(4)</sup>して、勲章を佩<sup>(5)</sup>びていた。故参<sup>(6)</sup>の大尉参謀が同僚を代表して棧橋<sup>(7)</sup>まで来ていた。

雨がどつどつと降っている。これから小倉までは汽車で一時間は掛からない。川<sup>(8)</sup>卯といふ家で飯を焚<sup>(9)</sup>かせて食う。夜が明けてから、大尉は走り廻つて、切符の世話やら荷物の世話やらしてくれる。

汽車の窓からは、崖<sup>(10)</sup>の上にびっしり立て並べてある小家が見える。どの家も戸を開け放して、女や子供がほとんど裸でいる。中には丁度朝飯を食っている家もある。仲<sup>(11)</sup>為<sup>(12)</sup>のような為事<sup>(13)</sup>をする労働者の家だと士官が話して聞せた。

(1) 鷄外自身をモデルにしている点が多い。(2) 福岡県北九州市の中心地。当時は町。第十二師団所在地。鷄外は同師団軍医部長として赴任した。(3) 「小倉日記」によると実際は明治三十二年六月十九日(月曜日)。(4) 「小倉日記」六月十九日の条に「午前三時門司港に至る」。(5) 陸軍服制には正装・礼装・通常礼装・軍装・略装の五種があり、通常礼装は宮中または皇族の午餐に陪する時、命課布達式の時、伺候式の時などに用いられる。(6) 古くからその職に在ること(人)。(7) 沖仲士。荷物をか

田圃たんぼの中に出る。稲の植附はもう済んでゐる。おりおり蓑みを着て手籠たごしを担いで畔道あぜみちをあるいている農夫が見える。

段々小倉が近くなつて来る。最初に見える人家は旭町あさひの遊廓ゆうかくである。どの家にも二階の欄干に赤い布団が掛けてある。こんな日に干すのでもあるまい。毎日降るのだから、こうして曝さらすのであるう。

がらがらと音がして、汽車が紫川むらさきがわの鉄道橋を渡ると、間もなく小倉の停車場に着く。参謀長を始め、大勢の出迎人がある。一同にそこそこに挨拶あいさつをして、室町むろまちの達見たつみという宿屋にはいった。

隊から来ている従卒じゆじゆに手伝てづつて貰もらつて、石田は早速正装に着更えて司令部へ出た。その頃は申告しんこの為方しかたなんぞは極きまつていなかつたが、廉かたあつて上官じやうかんに謁えつする時といつので、着任の挨拶は正装ですることになつていた。

翌日も雨が降つている。鍛冶町かじに借家いけがきがあるといふのを見に行く。砂地であるのに、道普請みちしんに石炭屑いしすすを使うので、薄墨色うすすみの水が町を流れている。

借家は町の南側になつている。生垣いけがきで囲んだ、相應な屋敷である。庭には石炭屑を敷かないので、綺麗な砂が降るだけの雨を皆吸い込んで、濡れたとも見えずにいる。真中まんなかに大きな百日紅さるすべりの木がある。垣の方に寄つて夾竹桃きょうちくとうが五六本立っている。

車から降りるのを見ていたと見えて、家主が出て来て案内をする。淡紙色の顔をし

た、萎しなびた爺じいさんである。

石田は防水布の雨覆あまおおいを脱いで、門口かどぐちを這はい入いつて、脱いだ雨覆を裏返して巻いて縁端えんばなに置こうとすると、爺さんが手に取った。石田は縁を濡らさない用心かと思ひながら、爺さんの顔を見た。爺さんは言訣いわけのように、この辺へんは往来から見える処に物を置くのは危険だということを話した。石田が長靴を脱ぐと、爺さんは長靴も一しよに持つて先に立つた。

石田は爺さんに案内せられて家を見た。この土地の家は大小の違があるばかりで、どの家も皆同じ平面図よに依よつて建てたように出来ている。門口を這入つて左側が外壁で、家は右の方へ長方形に延びている。その長方形が表側と裏側とに分れていて、裏側が勝手になつているのである。

東京から来た石田の目には、先ず柱べんがらが鉄舟てつふねか何かで、代赭たいしゃのような色に塗つてあるのが異様に感ぜられた。しかし不快だとも思わない。ただこの家なんぞは建ててから余り年数を経たものではないらしいのに、何となく古い、時代のある家のように思わ

- (1) 肥えたご。肥料にする糞尿を運ぶ桶。(2) 小倉を南から北へ貫流して海に注ぐ川。市の中心部では常磐橋・勝山橋などがかかつている。(3) 「小倉日記」六月十九日の条に「達見に投宿す。」とある。(4) 将校当番兵。将校に専属し、その使役に服する兵卒。(5) 正式の任退官等の場合に、所属する長官にその旨自身で届け出ること。(6) あらたまつた事情があつて。(7) 帯黄赤色の顔料。インドの Bengal からきた語。成分は酸化第二鉄。(8) 中国山東省代州から良質のものを産するので言ひつ。帯褐黄色の顔料。

れる。それでこんな家に住んでいたら、気が落ち付くだろうというような心持がした。表側は、玄関から次の間を経て、右に突き当る西の詰が一番好い座敷で、床の間が附いている。爺さんは「一寸御免なさい」と云って、勝手へ往つたが、外套と靴とを置いて、座布団と烟草盆とを持って出て来た。そして百日紅の植わっている庭の方の兩戸が疎らに締まつているのを、がらがらと繰り開けた。庭は内から見れば、割合に広い。爺さんは生垣を指さして、この辺は要塞が近いので石塀や煉瓦塀を築くことはやかましいが、表だけは立派にしたいと思つて問い合せて見たら、低い塀は築いても好いそうだから、其内都合をしてどうかしようと思つていと話した。

表通は中くらいの横町で、向いの平家の低い窓が生垣の透間から見える。窓には竹簾が掛けてある。その中で糸を引いている音がぶうんぶうんとねむたそうに聞えている。

石田は座布団を敷居の上に敷いて、柱に寄り掛かつて膝を立てて、ポケットから金天狗を出して一本吸い附けた。爺さんは縁端にしゃがんで何か言っていたが、いつか家の話が家賃の話になり、家賃の話が身の上話になった。この薄井という爺さんは夫婦で西隣に住んでいる。遅く出来た息子が豊津の中学に入れてある。この家を人に貸して、暮しを立てて倅の学資を出さねばならないということである。

それから裏側の方の間取を見た。こちらは西の詰が小さい間になっている。その次

がやや広い。この二間ふたまが表側の床の間のある座敷の裏になっている。表側の次の間と玄関との裏が、半ば土間になっている台所である。井戸は土間の隅に掘ってある。

縁側に出て見れば、裏庭は表庭の三倍位の広さである。所々に蜜柑みかんの木があつて、小さい実が沢山生なっている。縁に近い処には、瓦かわらで築いた花壇があつて、菊が造つてある。その傍そばに円石まるいしを疊かさねんだ井戸があつて、どの石の隙間すきまからも赤い蟹かにが覗のぞいている。花壇の向うは畠はたけになつていて、その西の隅に別当部屋べつとうべの附いた厩うまやがある。花壇の上にも、畠の上にも、蜜柑みかんの木の周囲まわりにも、蜜蜂みつばちが沢山飛とんでいるので、石田は大そう蜜蜂の多い処だと思つて爺さんに問うて見た。これは爺さんが飼かっているもので、巢ねは東側の外壁に弔つり下くだげてあるのであつた。

石田はこれだけ見て、一旦いったん爺さんに別れて帰つたが、家はかなり気に入つたので、宿屋のお上かみさんに頼んで、細かい事を取り極めて貰つて、二三日立つて引き越した。<sup>(5)</sup>横浜から舟に載せた馬も着いていたので、別当(6)に引き入れさせた。

勝手道具を買う。膳ぜん碗わんを買う。蚊帳かやを買う。買かいに行くのは従卒(7)の島村である。家主はまめな爺さんで、来ていろいろ世話を焼いてくれる。膳碗ぜんわんを買かうとき、爺さ

(1) 国防のために建設した防禦造営物。(2) 有事の際、障害になるので禁じたものと思われる。(3) 巻き煙草の名。(4) 福岡県京都郡豊津町。(現みやこ町)(5) 四日後の二十四日。(6) 乗馬の口取り。馬丁。(7) 六月十九日の日記に「兵僕島本四郎右衛門来り仕う。長門国豊浦郡農家の子なり」とある。



んが問うた。

「何人前入りまするかの。」

「二人前です。」

「下のものは入りませんか。」

「僕のと下女のとで二人前です。従卒は隊で食います。別当も自分で遣るのです。」  
蚊帳は自分のと下女のと別当のと三張買った。その時も爺さんが問うた。

「布団は入りませんか。」

「毛布があります。」

万事こんな風である。それでも五十円程掛かった。

女中を傭うというので、宿屋の達見のお上さんが口入屋の上さんをよこしてくれた。

石田は婆あさんを置きたいという注文をした。時という五十ばかりの婆あさんが来た。  
夫婦で小学校の教員の弁当をこしらえているもので、その婆あさんの方が来てくれたのだそうだ。不思議に饒舌らない。黙って台所をしてくれる。

二三日立った。毎日雨は降ったり歇んだりしている。石田は雨覆をはおつて馬で司令部に出る。東京から新に傭つて来た別当の虎吉が、始て伴をするとき、こう云った。

「旦那。馬の合羽がありませんがなあ。」

「有る。」

「ええ。それは鞍くらだけにかぶせる小さい奴やつならあります。旦那の膝ひざに掛けるのがありません。」

「そんなものは入らない。」

「それでもお膝ひざが濡ぬれます。どこの旦那も持っています。」

「膝ひざなんざあ濡ぬれても好いい。馬装ばしょうに膝掛ひざかけなんというものはない。外ほかの人は持っておつても、己おれは入らない。」

「へへへへ。それでは野木さんのお流義りゅうぎで。」

「己おれが入らないのだ。野木閣下ごんげの事はどうか知らん。」

「へえ。」

その後は別当べっとうも敢あえて言いわなない。

石田は司令部しんぷうぶから引掛ひきかけに、師团长しりたんはじめ上官じょうくわんの家に名刺めいしを出す。その頃は都督ととくがおられたので、それへも名刺めいしを出す。中には面会めんかいせられる方かたもある。内へ帰かえつて見ると、部下ぶかのものが名刺めいしを置きに来るので、いつでも二三枚まいずつはある。商人しょうじんが手土産てみやげなん

(1) 奉公人ほうこうにんなどを周旋しゆせんする職業しごく、またその人。(2) 安田やすださき。(3) 日記にっぴの田中寅吉たなかとらきち。(4) 乃

木大将なぎだいしょうが質実剛健しつじつこうけんを旨めいとしたこと。(5) 退出しゅつとの途中ちゆうちゆう。(6) 師团しりだん(旧陸軍編成上きゅうりくぐんへんせいじやうの単位たんいの一)司令

部ぶを有あし独立どくりつして作戦さくせんする)の長官ちやうくわん。当時たうじの第十二師团长じふにしだんちやうは中将井上光しやうしやうけいさみつ。(7) 当時たうじ、陸軍りくぐんの全国十二

師团しりだんを東、中、西の三部さんぶに分けた時の各部かぶの長ちやう。小倉こくらは西部担当せいぶたうたうの都督ととくの任地にんち。

ぞを置いて帰ったのもある。そうすると、石田はすぐに島村に持たせて返しに遣る。それだから、島村は物を貰うのを苦に病んでいて、自分のいる時に持って来たのは大抵受け取らない。

ある日帰つて見ると、島村と押問答をしているものがある。相手は百姓らしい風体ふうていの男である。見れば鶏の生きたのを一羽持っている。その男が、石田を見ると、にこにこして傍そばへ寄つて来て、こう云つた。

「少佐殿。お見忘になりましたか知れませんが、戦地でお世話になつた輜重輪卒しちようゆんそつの麻生あそうでござります。」

「うむ。軍司令部にいた麻生か。」

「はい。」

「どうして来た。」

「予備役(3)になりましたして帰っております。内は大里だいりでござります。少佐殿におなりになつて、こちらへお出いでだということを知りましたので、御機嫌伺ごきげんうかがいに参りました。これは沢山飼つております内の一羽でござりますが、丁度好い頃のでござりますから、持つて上りました。」

「ふむ。立派な鳥だなあ。それは徴発ではあるまいな。」

麻生は五分刈がりの頭を搔かいた。

「恐れ入ります。ついみんなが徴発徴発と申すもんでござりますから、ああいうことを申しましてお叱しかりを受けました。」

「それでも貴様はあれきり、支那人の物を取らんようになったから感心だ。」

「全くお蔭を持ちまして心得違を致しませんものですから、凱旋がいてんいたしますまで、どの位肩身が広がったか知れません。大連だいれんでみんなが背囊はいのうを調べられましたときも、銀の簪かんざしが出たり、女の着物が出たりして恥を掻く中で、わたくしだけは太息張おおいばりでござりました。あの金州きんしゅうの鶏なんぞは、ちゃんちんが、ほい、またお叱を受け損う処でござりました、支那人が逃げた跡に、卵を抱いていたので、主ぬしはないのだと申しますのに、そんならその主のない家に持つて行って置いて来いと仰おつしやったのには、実に驚きましたのでござります。」

「はははは。己は頑固だからなあ。」

「どう致しまして。あれがわたくしの一生の教訓になりましたのでござりました。もうお暇いじまを致します。」

- (1) 軍専用物資の輸送・補給に従事する運搬兵。のち、輜重兵特務兵と改称した。(2) 「小倉日記」三十三年五月二十日の条に「植波雄鶏を贈る。雌を贖いて配とす」とあるので、この人のことか。(3) もと現役を終つたものが服した常備兵役。(4) 鹿兒島本線で門司と小倉との中間の町。(5) 中国、遼東半島の末端にある港市。(6) ランドセル。ここは旧陸軍用のもの。(7) 中国、金州半島の要地。(8) 中国人のことを輕蔑して言つた語。

「泊って行かんか。己の内は戦地と同じで御馳走はないが。」

「奥様はいらっしゃりませんか。」

「妻さいは此間こないだ死んだ。」

「へえ。それはどうも。」

「島村が知っているが、まるで戦地のような暮しを遣っているのだ。」

「それは御不自由でいらつしやりましたよ。詰まらないことを申し上げて、お召替めしかえのお邪魔を致しました。これでお暇いじまを致します。」

麻生は鶏を島村に渡して、鞋わらじをびちゃびちゃ言わせて帰って行った。

石田は長靴を脱いで上がる。雨覆を脱いで島村にわたす。島村は雨覆と靴を持って勝手へ行く。石田は西の詰つづみの間に這入って、床の間に往って、帽をそこに据えてある将校行李しょうこうりの上に置く。軍刀を床の間に横に置く。これを初て来た日に、お時婆さんが床の壁に立て掛けて、叱られたのである。立てた物は倒れることがある。倒れば刀が傷いたむ。壁にも痕きずが附くかも知れないというのである。

床の間の前には、子供が手習に使うような机が据えてある。その前に毛布が畳んで敷いてある。石田は夏衣袴なつひこしのまま毛布の上に胡坐あぐらを掻いた。そこへ勝手から婆あさんが出て来た。

「鳥はどうしなさりますかの。」

「飯の菜がないのか。」

「茄子に隠元豆が煮えておりますが。」

「それで好い。」

「鳥は。」

「鳥は生かして置け。」

「はい。」

婆あさんは腹の中で、相変らず吝嗇な人だと思つた。この婆あさんの観察した処では、石田に二つの性質がある。一つは吝嗇である。肴は長浜の女が盤台を頭の上に載せて売りに来るのであるが、まだ小鯛を一度しか買わない。野菜が旨いというので、胡瓜や茄子ばかり食っている。酒はまるで吞まない。菓子は一度買って来いと云われて、名物の鶴の子を買つて来た処が、「まずいなあ」と云いながら皆平げてしまつて、それきり買って来いと云わない。今一つは馬鹿だということである。物の直段が分らない。いくらと云つても黙つて払う。人が土産を持つて来るのを一々返しに遣る。婆あさんは先ずこれだけの観察をしているのである。

- (1) 衣袴は制服の上下一組をいう軍隊語。夏服。(2) 古歌などで聞長浜とも言われた。小倉東北方の海岸。(3) 「小倉日記」三十三年一月三十日の条に「落雁の製に似て卵形なり。色皆白し」とある。小倉の福田屋が製造元。文化年間からの歴史を持つ。

婆あさんが立つとき、石田は「湯が取つてあるか」と云つた。「はい」と云つて、婆あさんは勝手へ引込んだ。

石田は、裏側の詰の間に<sup>つめ</sup>出る。ここには水指と漱茶碗と湯を取つた金盥とバケツとが置いてある。これは初の日から極めてあるので、朝晩とも同じである。

石田は先ず楊枝を使う。漱をする。湯で顔を洗う。石鹼は七十銭位の舶来品を使つている。何故そんな贅沢をするかと人が問うと、石鹼は石鹼でなくてはいけない、賈物を使う位なら使わないと云つている。五分刈頭を洗う。それから裸になつて体じゅうを丁寧<sup>か</sup>に揩く。同じ金盥で下湯を使う。足を洗う。人が穢いと云うと、己の体は清潔だと云つている。湯をバケツに棄てる。水をその跡に取つて手拭を洗う。水を棄てる。手拭を絞つて金盥を揩く。また手拭を絞つて掛ける。一日に二度ずつこれだけの事をする。湯屋には行かない。その代り戦地でも舎営<sup>いん</sup>をしている間は、これだけの事は廃せないのである。

石田は襦袢袴下<sup>じゆばんこした</sup>を着替えてまた夏衣袴を着た。常の日は、寝巻に湯帷子<sup>ゆかた</sup>を着るまで、このままでいる。それを客が来て見て、「野木さんの流義か」と云うと、「野木閣下の事は知らない」と云うのである。

机の前に据わる。膳が出る。どんなにゆっくり食つても、十五分より長く掛かつたことはない。

外を見れば雨が歇やんでいる。石田は起つて台所に出た。飯を食っている婆あさんが箸はしを置くのを見て「用ではない」と云いながら、土間に降りる縁に出た。土間には虎吉が鳥に米を蒔まいて遣つて、蹲しゃがんで見ている。石田も鳥を見に出たのである。

大きな雄鶏おんどりである。総身の羽が赤褐色で、頸くびに柑子色(3)の領巻くびまきがあつて、黒い尾を長く垂れている。

虎吉は人の悪そうな青黒い顔を挙げて、ぎよろりとした目で主人を見て、こう云つた。

「旦那。こいつは肉が軟やわらかですぜ。」

「食うのではない。」

「へえ。飼つて置くのですか。」

「うむ。」

「そんなら、大屋さんの物置ふせの明あいているのがあつたから、あれを借りて来ましよう。」

「買うまでは借りても好いい。」

こう云つて置いて、石田は居間に帰つて、刀とうを弔つつて、帽ぼうを被かつて玄関に出た。玄

(1) 軍隊が家屋内に休養宿泊すること。

(2) 軍隊用語。シャツとズボン下。

(3) ミカン色。

(4)

地に伏せて鳥などを飼う籠。



関には鳥村が磨いて置いた長靴がある。それを庭に卸して穿く。がたがたいう音を聞き附けて婆あさんが出て来た。

「お外套は。」

「すぐ帰るから入らん。」

石田は鍛冶町を西へ真直まっすぐに鳥町まで出た。そこに此間名刺こないだを置いて歩いたとき見て置いた鳥屋がある。そこで牝鶏めんどりを一羽買って、伏籠を職人に注文して貰うように頼んだ。鳥は羽の色の真白な、むくむくと太ったのを見立てて買った。跡から持たせておこす(1)ということである。石田は代を払って帰った。

牝鶏めんどりを持って来た。虎吉は鳥屋を厩うまやの方へ連れて行って何か話し込んでゐる。石田は雌雄めすおとこを一しよに放して、雄鶏おとこが片々の羽をひろげて、雌の周囲まわりを半圈状(2)に歩いて挑むのを見ている。雌は兎角とかく逃げよう逃げようとしているのである。

間もなく、まだ外は明るいのに、鳥は不安の様子をして来た。その内、台所の土間の隅に棚のあるのを見附けて、それへ飛び上がろうとする。罫わぢらを捜すのである。石田は別当に、「鳥を寝かすようにして遣れ」と云って居間に這入った。

翌日から夜明に鶏が鳴く。石田は愉快だと思つた。所が午後引けて帰って見ると、牝鶏が二羽になつてゐる。婆あさんに問えば、別当が自分のを一羽一しよに飼わせて貰いたいと云つたということである。石田は嫌な顔いやをしたが、咎めとがもしなかつた。二

三日立つうちに、また牝鶏が一羽殖えて雄鶏共に四羽になった。今度のも別当の、どこかから貰つて来たのだということであつた。石田はまた嫌な顔をしたが、やはり別当には何とも云わなかつた。

四羽の鶏が屋敷中を糞つて歩く。薄井の方の茄子畠に侵入して、爺さんに追われて帰ることもある。牝鶏同志で喧嘩をするので、別当が強い奴を掴まえて伏籠に伏せて置く。伏籠はもう出来て来た新しいので、縁の下を為切つて拵えて、入口には板切と鳥屋は別当が薄井の爺さんにことわつて、縁の下を為切つて拵えて、入口には板切と割竹とを互違に打ち附けた、不細工な格子戸を嵌めた。

ある日婆あさんが、石田の司令部から帰るのを待ち受けて、こう云つた。

「別当さんの鳥が玉子を生んだそうで、旦那様が上がるなら上げてくれえと云いなさります。」

「入らんと云え。」

婆あさんは驚いたような顔をして引き下がった。これからは婆あさんが度々卵の話をする。どうも別当の牝鶏に限って卵を生んで、旦那様のは生まないというのである。婆あさんはこの話をするたびに、極めて声を小さくする。そして不思議だ不思議だと

(1) 持たせてよこす。

(2) 半円状のこと。

いう。婆あさんはこの話の裏面に、別に何物かがあるのを、石田に発見して貰いたいのである。ところが石田にはどうしてもそれが分らないらしい。どうも馬鹿なのだから、分らないでもしようがない。そこでじれったがりながら、反復して同じ事を言う。しかし自分の言うことが別当に聞えるのは強いので、次第に声は小さくなるのである。とうとうしまいには石田の耳の根に摩り寄って、こう云った。

「こねえな事を言うては悪うござりますが、玉子は旦那様の鳥も生まんことはござりません。どれが生んでも、別当さんが自分の鳥が生んだというのでござりますがな。」婆あさんはおそろおそろ云って、石田が怒って大声を出さねば好いかと思つていた。ところが石田は少しも感動しない。平気な顔をしている。婆あさんはじれったくて溜まらない。今度は別当に知れても好いから怒つて貰いたいような気がする。そしてとうとう馬鹿に附ける薬はないとあきらめた。

石田は暫く黙つていて、極めて冷然としてこう云った。

「己は玉子が食いたいときには買うて食う。」

婆あさんは菌痒いのを我慢するという風で、何か口の内でぶつぶつ云いながら、勝手へ下つた。

七月十日は石田が小倉へ来てからの三度目の日曜日であった。石田は早く起きて、例の狭い間で手水を使った。これまでは日曜日にも用事があつたが、今日は始て日曜

日らしく感じた。寝巻の浴帷子を着たままで、兵児帯をぐるぐると巻いて、南側の裏縁に出た。南国の空は紺青いろに晴れていて、蜜柑の茂みを洩れる日が、きらきらした斑紋を、花壇の周囲の砂の上に印している。厩には馬の手入をする金櫛の音がしている。折々馬が足を踏み更えるので、蹄鉄が厩の敷板に触れてことごとくという。そうすると別当が「こら」と云って馬を叱っている。石田は気がのんびりするような心持で、朝の空気を深く呼吸した。

石田は、縁の隅に新聞反古の上に、裏と裏とを合せて上げてあつた麻裏を取つて、庭に卸して、縁から降り立った。

花壇のまわりをぶらぶら歩く。庭の井戸の石畳にいつもの赤い蟹のいるのを見て、井戸を上から覗くと、蟹は皆隠れてしまう。苔の附いた弔瓶に短い竿を附けたのが抛り込んである。弔瓶と石畳との間を忙しげに水馬が走っている。

一本の蜜柑の木を東へ廻ると勝手口に出る。婆あさんが味噌汁を煮ている。別当は馬の手入をしまつて、蹄に油を塗つて、勝手口に來た。手には飼桶を持ってゐる。主人に会釈をして、勝手口に置いてある麦箱の蓋を開けて、麦を飼桶に入れている。石田は暫く立つて見ている。

(一) 麻裏草履。平たく編んだ麻裏につけた草履。

「いくら食うか。」

「ええ。これで三杯ぐらいが丁度宜しいので。」

別当はぎよろつとした目で、横に主人を見て、麦箱の中に抛り込んである、縁の虧けた轆轤細工の飯鉢を取って見せる。石田は黙って背中を向けて、縁側の方へ引き返した。

花壇の処まで帰った頃に、牝鶏が一羽けたたましい鳴声をして足元に駈けて来た。それと一しよに妙な声が聞えた。まるで聒々児の鳴くようにやかましい女の声である。石田が声の方角を見ると、花壇の向うの畠を為切った、南隣の生垣の上から顔を出している四十くらいの女がいる。下太りのかぼちやのように黄いろい顔で頭のとっぺんには、油固めの小さい丸髻が載っている。これが声の主である。

何か盛んにしゃべっている。石田は誰に言っているかと思つて、自分の周囲を見廻したが、別に誰もいない。石田の感ずる所では、自分に言っているとは思われない。しかし自分に聞せるために言っているらしい。日曜日で自分の内にいるのを候つていしゃべり出したかと思われる。謂わば天下に呼号して、旁ら石田をして聞かしめんとするのである。

言うことが好くは分からない。一体この土地には限らず、方言というものは、怒つて悪口を言うような時、最も純粹に現れるものである。目上の人に物を言ったり何か

することにすれば、修飾するから特色がなくなってしまう。この女の今しゃべっているのが、純粹な豊前語である。

そこで内のお時婆あさんや家主の爺さんの話と違って、おおよその意味は聞き取れるが、細かい nuances は聞き取れない。なんでも鶏が垣を踰えて行って畠を荒らして困まるといふことらしい。それを主題にして堂々たる Philippica を発しているのである。女はこんな事を言う。豊前には諺がある。何町歩とかの畑を持たないでは、鶏を飼ってはならないといふのである。然るに借家ずまいをしていて鶏を飼うなんぞというのは僭越もまた甚しい。サアベルをさして馬に騎っているものは何をしてもいいと思うのは心得違である。大抵こんな筋であつて、攻撃余力を残さない。女はこんな事も言う。鶏が何をしているか知らないばかりではない、傭婆あさんが勝手に物をごまかして、自分の内の暮しを立てているのも知るまい。別当が馬の麦をごまかして金を溜めようとしているのも知るまい。こういうときは声を一層張り上げる。婆あさんにも別当にも聞せようとするのである。女はこんな事も言う。借家人のすることは家主の責任である。サアベルが強くて物が言えないようなら、サアベルなんぞに始から家を貸さないが好い。声はいよいよ高くなる。薄井の爺さんにも聞せようとするのである。

(1) (英)。陰影。調子など。

(2) (ラテン語)。激しい攻撃演説。Demosthenes が Philip 王を罵倒し

た十二演説の一つ。(3) もと軍人や警官が腰にさげた西洋風の刀剣。洋剣。

る。

石田は花壇の前に棒のように立って、しゃべる女の方へ真向まむきに向いて、黙もくって聞きいている。顔にはおりおり微笑の影が、風の無い日に木葉このはが揺らぐように動く外には、何の表情もない。軍服を着て上官の小言を聞いている時と大抵同じ事ではあるが、少し筋肉が弛ゆるんでいただけ違う。微笑の浮ぶのを制せないだけ違う。

石田はこんな事を思っている。鶏は垣を越すものと見える。坊主が酒を般はん若湯にゃとうというといふことは世間に流布しているが、鶏を鑽籠菜せんりさいというといふことは本を読まないものは知らない。鶏を貫つた処が、食いたくもなかったもので、生かして置こうと思つた。生かして置けば垣も越す。垣を越すかも知れないといふことまで、初めに考3えなかつたのは、用意が足りないようではあるが、何をするにもそんなeventualité3を眼中に置いては出来ようがない。鶏を飼うという事実に、この女が怒るといふ事実が附帯して来るのは、格別驚くべきわけでもない。なんにしる、あの垣の上に妙な首が載つていて、その首が何の遠慮もなく表情筋を伸縮させて、雄弁を揮ふるつている処は面白い。東京にいた時、光線の反射を利用して、卓の上に載せた首が物を言うように思わせる見世物を見たことがあった。あれは見世物師が余りprétentieux4であつたので、こつちの反感を起して面白くなかつた。あれよりは此方がよほど面白い。石田はこんなことを思っている。

垣の上の女は雄弁家ではある。しかしいかなる雄弁家も一の論題についてしゃべり得る論旨には限がある。垣の上の女もとうとう思想が涸渴こかつした。察するに、彼は思想の涸渴を感じると共に失望の念を作なすことを禁じ得なかつたであろう。彼は経験上こんな雄弁を弄ろうする度に、誰か相手になつてくれる。少くも一言ひとことくらい何とか言つてくれる。そうすれば、水の流が石に触れて激するように、弁論に張合が出て来る。相手も雄弁を弄することに成れば、旗鼓きこ相当てつて、彼の心が飽き足るであろう。彼は石田のような相手には始て出逢つたであろう。そして暖簾のれんに腕押をしたような不愉快な感じをしたであろう。彼は「ええとも、今度来たら締めてしまふから」と言い放つて、境の生垣の蔭へ南瓜かぼちゃに似た首を引込めた。結末は意味の振つている割に、声に力がなかつた。

「旦那さん。御膳が出来ましたが。」

婆あさんに呼ばれて、石田は朝飯を食いに座敷へ戻つた。給仕をしながら婆あさんが、南裏の上さんは評判の悪者で、誰も相手にならないのだというような意味の事を話した。石田はなるだけ鳥を伏籠ふせごに伏せて置くようにしろと言ひ付けた。その時婆あ

(1) 僧家でいう酒の隠語。

(2) 鶏の異名。「東坡志林」に「僧謂フ酒者ハ為シ二般若湯ト、魚ヲ為シ二水梭花ト、鶏ヲ

為ス二鑽籬菜ト」(3) (仏)。偶然性。偶発事。不測事件。(4) (仏)。見せかけの。わざとらしい。気取つた。

(5) 軍旗と太鼓と、必要なものが両方ともにそろつて。



さんは声を低うしてこういうことを言った。主人の買って来た、白い牝鶏が今朝は卵を抱いている。別当も白い牝鶏の抱いているのを、外の牝鶏が生んだのだとは言いにくいと見えて黙っている。卵をたつた一つかえ孵させるのは無駄だから、取つて来ようかと云うのである。石田は、「抱いているなら構わずに抱かせて置け」と云った。

石田は飯を済ませてから、勝手へ出て見た。まだ縁の下の鳥屋の出来ない内に寝かしたことのある、台所の土間の上の棚がわら藁を布しいたままになっていた。白い牝鶏はその上上がっている。常からむくむくした鳥であるのが、羽を立てて体をふくらし、いつもの二倍位の大きさになって、首だけ動かしてあちこちを見ている。茶碗を洗っていた婆あさんが来て鳥の横腹をつつく。鳥は声を立てる。石田は婆あさんの方を見て云った。

「どうするのだ。」

「旦那さんに玉子を見せて上げようと思ひまして。」

「廃よせ。見んでも好いい。」

石田は思ひ出したように、婆あさんにこう云うことを問うた。世帯を持つとき、櫛ますを買つたはずだが、別当はあれで麦を量りはしないかと云うのである。婆あさんは、別当の櫛ますを使つたのは見たことがないと云った。石田は「そうか」と云つて、ついでと部屋に帰つた。そして将校行李の蓋を開けて、半切毛布はんぎれに包んだ箱を出した。

Havana の葉巻である。石田は平生天狗を呑んでいて、これならどんな田舎に行軍をしても、補充の出来ない事はないと云っている。たまには上等の葉巻を呑む。そして友達と雑談をするとき、「小説家なんぞは物を知らない、金剛石入の指環を嵌めた金持の主人公に Maria を吞ませる」などと云って笑うのである。石田がたまに呑む葉巻を毛布にくるんで置くのは、火薬の保存法を応用しているのである。石田はこう云っている。己だつて大将にでもなれば、烟草も毎日新しい箱を開けるのだ。今のうちは箱を開けてから一月も保存しなくてはならないのだから、工夫を要すると云っている。石田は葉巻に火を付けて、さも愉快げに、一吸吸って、例の手習机に向つた。北向の表庭は、百日紅の疎な葉越に、日が一ぱいにさして、夾竹桃にはもうとところどころ花が咲いている。向いの内の糸草は、今日もぶうんぶうんと鳴っている。

石田は床の間の隅に立て掛けてある洋書の中から Labryère の性格という本(3)を抜き出して、短い鋭い章を一つ読んではじつと考えて見る。また一つ読んではじつと考えて見る。五六章も読んだかと思うと本を措いた。

それから舶来の象牙紙と封筒との箱入になつていゝのを出して、ペンで手紙を書き

(1) 前出の「金天狗」。(2) フィリップソンのマニラ産のタバコ。(3) Jean de la Bruyère (1645-1696)。ジャン・ド・ラ・ブリユイエール。フランスの随筆家。モラリスト。「性格論」(一六八七)は時代の風潮を批判した名著。(4) アイヴォリー紙とも言う。カード・名刺などに使われる洋紙の一種。

出した。石田はペンと鉛筆とで万事済ませて、硯すずりというものを使わない。稀まれに願届ねがいとどけなぞが入れば、書記に頼む。それは陸軍に出てから病氣引籠ひきこもりをしたことがないという位だから、めったに入らない。

人から来た手紙で、返事をしなくてはならないのは、函囊ずのうしの中に入れておいたのだから、それを出して片端から返事を書くのである。東京に、中学に這入っている息子を母に附けて置いてある。第一に母に遣る手紙を書いた。それから筆を措かずに二つ三つ書いた。そして母の手紙だけを將校行李にしまつて、外の手紙は引き裂いてしまつた。

午ひるになった。飯を済ませて、さつき手紙を書き始めるとき、灰皿の上に置いた葉巻の呑みさしに火を附けて、北表の縁に出た。空はいつの間にか薄い灰色になっている。汽車の音がする。「蝙蝠傘張替修繕は好ようがすの」と呼んで、前の往來を通るものがある。糸車のぶうんぶうんは相変らず根調ねぢうをなしている。

石田はどこか出ようかと思つたが、空模様が変わつていたので、止める氣になつた。暫くして座敷へ這入つて、南アフリカの大きい地図をひろげて、此頃戦争が起りそうになつてゐる「Transvaal」(4)の地理を調べている。こんな風で一日は暮れた。

三四日立つてからの事である。もう役所は午引ひるひげになつてゐる。石田は馬に蹄鉄を打たせに遣つたので、司令部から引掛ひきがけに、紫川の左岸の狭い道を常磐橋とらわばしの方へ歩いてい

ると、戦役以来心安くしていた中野<sup>(5)</sup>という男に逢った。中野の方から声を掛ける。

「おい。今日は徒歩かい。」

「うむ。鉄を打ちに遣ったのだ。君はどうしたのだ。」

「僕のは海に入れに遣った。」

「そうかい。」

「非常に喜ぶぜ。」

「そんなら僕も一遍遣つて見よう。」

「別当が泳げなくちゃあだめだ。」

「泳げるような事を言っていた。」

中野は石田より早く卒業した士官である。今は石田と同じ歩兵少佐で、大隊長をしている。少し太り過ぎている男で、性質から言えば老実家<sup>(7)</sup>である。馬をひどく可哀がる。中野は話を続けた。

(1) 地図などを入れて将校が腰にさげていた革製のカバン。(2) 息子は長男於菟。一九〇一年(明治三十四)年、独逸協会中学第二学年入学。満十一歳。(3) 基本的な調子。(4) トランスヴァール。

一九一〇年の南アフリカ連邦成立以前のボーア人共和国の一つ。一九〇二年、ボーア戦争の結果イギリス領となり、現在は南ア共和国北東部の州。(5) 明治三十七、八年の日露戦争のこと。(6) 中原

涉のことらしい。「小倉日記」明治三十二年九月十五日の条に「夜中原涉招飲す。中原は明治二十七年平壤陥りしとき、旅団副官たりき。」とある。(7) ことに慣れてまめやかなこと。

「君に逢つたら、いつか言つて置こうと思つたが、ここには大きな溝どぶに石を並べて蓋ふたをした処ばかがあるがなあ。」

「あの馬借ばじやくに往く通とほだろう。」

「あれだ。魚町うおまちだ。あの上を馬で歩いちゃあ行かんぜ。馬は人間とは目方が違うからなあ。」

「うむ。そうかも知れない。ちつとも気が附かなかつた。」

こんな話をして常磐橋に掛かつた。中野が何か思い出したという様子で、歩度を緩めてこう云つた。

「おう。それからも一つ君に話して置きたいことがあつた。馬鹿な事だがなあ。」

「何だい。僕はまだ来たばかりで、なんにも知らないんだから、どしどし注意を与えてくれ給え。」

「実は僕の内の縁がわからは、君の内の門が見えるので、妻さいの奴やつが妙な事を発見したというのだ。」

「はてな。」

「君が毎日出勤すると、あの門から婆おばあさんが風炉敷ふうろしきづつみ包づつみを持って出て行くというのだ。ところが一昨日おとつひだったかと思う、その包が非常に大きいというので、妻がひどく心配していたよ。」

「そうか。そう云われれば、心当こころあたりがある。いつも漬物を切らすので、あの日には茄子と胡瓜を沢山に漬けて置けと云ったのだ。」

「それじゃあ自分の内へも沢山漬けたのだろう。」

「はははは。しかし兎とに角難かくあがと有う。奥さんにも宜しく云ってくれ給え。」

話しながら京町(2)の入口まで来たが、石田は立ち留まった。

「僕は寄って行く処があった。ここで失敬する。」

「そうか。さようなら。」

石田は常磐橋を渡つて跡へ戻つた。そして室町の達見へ寄つて、お上さんに下女を取り替えることを頼んだ。お上さんは狎ちんの頭をさすりながら、笑つてこう云つた。

「あんた様は婆あさんがええとお云なされたがな。」

「婆あさんは行かん。」

「どうかしましたかな。」

「どうもしたのじゃない。大分(3)えらそうだから、丈夫な若いのをよこすように、口入くちいれ

の方へ頼んで下さい。」

(1) 小倉の町名の一。紫川と支流とが成す三角地帯にある町。

(2) 鷗外は明治三十三年十二月二十

(3)

四日からこの町の五丁目百五十四番地に住んだ。鉄道、遊廓に近く、劇場、料理屋などがあった。大儀(3)そう、荷が勝っているようだから。

「はいはい。別品さんを上げるように言うて遣ります。」

「いや、下女に別品は困る。さようなら。」

石田はそれから帰掛かえりがけに隣へ寄つて、薄井の爺さんに、下女の若いのが来るから、どうぞお前さんの処の下女を夜だけ泊りに来させて下さいと頼んだ。そして内へ帰つて黙っていた。

翌日口入の上さんが来て、お時婆あさんに話をした。年寄に骨を折らせるのが気の毒だと、旦那が云うからと云つたそうである。婆あさんは存外素直に聞いて帰ることになった。石田はまだ月の半なかばであるのに、一箇月分の給料を遣つた。

夕方になって、口入の上さんは出直して、目見えめみえの女中にようぢゆうを連れて来た。二十五六位の髪かみの薄い女で、お辞儀をしながら、横目で石田の顔を見る。襦袢じゆばんの袖そでにしている水みづ浅葱あさぎのめりんすが、一寸位袖口から覗のぞいている。

石田は翌日島村を口入屋へ遣つて、下女を取り替えることを言い付けさせた。今度は十六ばかりの小柄で目のくりくりしたのが来た。気性もはきはきしているらしい。これが石田の氣に入つた。

二三日置いて見て、石田はこれに極めた。比那古ひなこのもので、春はるというのだそうだ。男のような肥後詞ひごことばを遣つて、動作も活潑である。肌はだに琥珀色こはくしきの沢さわがあつて、筋肉が締しまっている。石田は精悍せいかんな奴だと思つた。

しかし困る事には、いつも茶の堅縞たてしまの単物を着ているが、膝の処には二所ふたどころばかりつぎが当たっている。それで給仕をする。汗臭い。

「着物はそれしか無いのか。」

「ありません。」

平気で微笑を帯びて答える。石田は三枚持つている浴帷子ゆかたを一枚遣つた。

一週間程立つた。春と一しよに泊らせていた薄井の下女が暇を取つて、師団長の内へ住み込んだ。春の給料が自分の給料の倍だというので、羨ましがって主人を取り替えたそうである。そこで薄井では、代かわりに入れた分の下女を泊りによこさないことになった。石田は口入の上さんと呼んで、小女をもう一人傭いたいと云つた。上さんが、そんなら内の娘をよこそうと云つて帰つた。

口入屋の娘が来た。年は十三で久5というのである。色の真黒な子で、頗すこぶる不潔で、頗る行儀が悪い。翌朝五時頃にぶつと妙な音がするので、石田は目を醒ました。後に聞けば、勝手では朝起きて戸を開けるまで、提灯ちようちんに火を附けることにしている。

(1) 奉公人などが主人にはじめて会うこと。(2) 薄いあさぎ色。(3) 現、八代市日奈久。(4) 「小倉日記」明治三十二年六月二十八日に「婢春を雇う。肥後国比那古の産なり。」とある。(5) 「小紺珠」に「小倉にありしとき請宿の娘にて年は十四、行儀は知らずというを小間遣にやといぬ。」とあり、この娘が提灯の柄を障子に穴をあけて吊るしたのを見つけたことが出ている。



提灯の柄えの先に鉤かぎが附ついているのを、春はいつも長押ながしの釘くわいに懸かけていたのだそうだ。その提灯を久ひさに持つもつていろと云いったところが、久ひさが面倒めんどうがつて、提灯の柄えで障子しやうしを衝つき破やぶつて、提灯を障子しやうしにぶら下げたということである。石田は障子しやうしに穴あなのあるのが嫌きらいで、一々自分おのれで切張きりばりをしてしているのだから、この話を聞いて嫌いやな顔かほをした。

石田は口入屋くちいりやの上うへさんを呼よんで、久ひさを返かへしたいと云いった。返かへして代かわりを備つう積もりであつた。ところが、上うへさんは何が悪わるいか聞いて直たださせると云いう。何なに一つ悪わるくないことのない子こである。石田は窮きうして、なんにも悪わるくはない。女中にようぢゆうは一人ひとりで好こいと云いった。

石田は達見たつみに往ゆつて、第二だいにの下女したごの傭よう聘へいを頼たのんだ。お上お上さんは狎なをいじりながら、石田の話を聞いて、にやりにやり笑わらつてゐる。そしてこう云いうのである。

「あんたさん、立派りつぱなお妾めかけでも置おきなさればええにな。」

「馬鹿ばかな事を言いつちやいかん。」

兎うに角頼かくたのむと言いい置いて、石田は帰かへつた。しかし第二だいにの下女したごはなかなか来きない。石田はとうとう若い下女したご一人ひとりを使つかつてゐることになつた。

三四日さんじふにち立たつた。七月三十一日しちがつさんじゅういちにちになつた。朝あ起きて顔かほを洗あいに出いると、春はるが雛ひよこの孵かえたのを知らせた。石田は急いそいで顔かほを洗あつて台所だいしよへ出いて見た。白しろい牝め鶉うずらの羽はねの間まから、黄きいろい雛ひよこの頭あたまが覗のぞいてゐるのである。

商人しやうじんが勘定かんだいを取りとりに来る日ひなので、旦那だんなが帰かへつてから払はらうと云いえと、言いい置いて役やく

所へ出た。午ひるになつて帰つて見ると、待つてゐるものもある。石田はノオトブックにペンで書き留めて、片端から払つた。

晩になつてから、石田は勘定を当つて見た。小倉に来てから、始めて纏まとまつた一月間の費用を調べることが出来るのである。春を呼んで、米はどうなつてゐるかと問うて見ると、丁度米櫃こめびつが虚からになつて、跡は明日あした持つて来るのだと云う。そこで石田は春を勝手へ下らせて、跡で米の量を割つて見た。陸軍で極めてゐる一人一日精米六合といふのを廻はるかに超過してゐる。石田は考えた。自分はどうしても兵卒の食う半分も食わぬい。お時婆あさんも春も兵卒ほど飯を食いそうにはない。石田は直すくにお時婆あさんの風炉敷包の事を思い出した。そして徐おもむろにノオトブックを将校行李うちの中へしまった。

八月になつて、司令部のもつてんで休暇を取る。師団長②は家族を連れて、船小屋の温泉へ立たれた。石田は纏まとまつた休暇を貰わずに、隔日に休むことにしてゐる。

表庭の百日紅に、ぼつぼつ花が咲き始める。おりおり蟬せみの聲が向いの家の糸車の音にまじる。六日は日曜日で、石田の処へも暑中見舞の客が沢山来た。初め世帯を持つときに、渋紙のようなもので拵こしらえた座布団を三枚買った。まだ余り使わぬのの中に入れた綿が方々に寄つて塊になつてゐる。客が三人までは座布団を敷かせることが出

(一) 頼んで雇うこと。 (二) 「小倉日記」三十二年八月四日、五日に同様の記事が見える。船小屋温泉は福岡県筑後市。

来るが、四人落ち合うと、畳んだ毛布の上に据わらせられる。今日などはとうとう毛布に乗ったお客があつた。

客は大抵帷子かたびらに袴はかまを穿はいて、薄羽織を被きて来る。薄羽織は勿論、袴というものも石田などは持つていないのである。石田はこんな日には、朝から夏衣袴なついきを着て対応する。

客は大抵同じような事を言つて帰る。今年は暑が去年より軽いようだ。小倉は人氣が悪くて、物価が高い。殊に屋賃をはじめ、将校の階級によつて価あたが違ちがうのは不都合である。休暇を貰つても、こんな土地では日の暮らしようがない。町中まちじゅうに見る物はな  
い。温泉場に行くにしても、一日市のような近い処は詰まらず、遠い処は不便で困る。  
先ずこんな事である。石田はただはあ、はあと返事をしてゐる。

中には少し風流がつて見る人もある。庭の方を見て、海が見えないのが遺憾だと云つたり、掛物を見て書画の話をしたりする。石田は床の間に、軍人に賜たまつた勅語を細字に書かせたのを懸かけている。これを将校行李に入れてどこへでも持つて行くばかりで、外に掛物というものは持つていないのである。書画の話なんぞが出ると、自分には分らないと云つて相手にならない。

翌日あたりから、石田も役所へ出掛に、師団長、旅団長、師団の参謀長、歩兵の聯隊長、それから都督と都督部参謀長との宅位に名刺を出して、それで暑中見舞を済ませた。

時候は段々暑くなつて来る。蟬の音が、向いの家の糸車の音と同じように、絶間なく聞える。夕風ゆうなぎの日には、日が暮れてから暑くて内うちににくい。さすがの石田も湯帷ゆか子こに着更たえてぶらぶらと出掛ける。初のうちは小倉の町を知ろうと思つて、ぐるぐる廻たつた。南の方は馬借うまかから北方きたかたの果はまで、北方には特科隊とくかたいが置いてあるので、好く知っている。そこで東の方へ、舟を砂の上に引き上げてある長浜の漁師村のはずれまで歩く。西の方へ、道普請みちうらに使う石炭屑いしすすが段々少なくなつて、天然の砂の現れて来る町を、西鍛冶屋町のはずれまで歩く。しまいには紫川の東の川口で、旭町あさひという遊廓の裏手うらでになつている、お台場おだいばの址あとに涼むには一番好いと極めて、材木の積んであるのに腰を掛けて、夕風の蒸暑い盛を過すことにした。そんな時には、今度東京に行つたら、三本足の床几しようぎを買つて来て、ここへ持つて来ようなんぞと思つている。

解かえた雛ひなごは雌メであつた。至極丈夫で、見る見る大きくなる。大きくなるに連れて、羽の色が黒くなる。十日ばかりで全身真黒になつてしまった。まるで鴉からすの子のようである。石田が掴つかまえようとすると、親鳥が鳴くので、石田は止めてしまふ。

十一日は陰曆の七夕の前日である。「笹あさは好よしか」と云つて歩く。翌日になつて見

(1) 裏をつけないひとえもの。

(2) 小倉南方の郊外。

(3) 歩兵でない軍隊(騎・砲・工兵、その他)。

北方には歩兵営もあつたが、騎・工・輜重・砲兵の兵営もあつた(「小倉日記」)。

(4) 要害の地に築

き大砲を据え海防に備えた施設。

ると、五色の紙に物を書いて、竹の枝に結び附けたのが、家毎に立ててある。小倉にはまだ乞巧奠(1)の風俗が、一般に残っているのである。十五六日(2)になると、「竹の花立は入りませんか」と云つて売つて歩く。盂蘭盆(3)が近いからである。

十八日が陰暦の七月十三日である。百日紅の花の上に、雨が降つたり止んだりしている。向いの糸車は、相変らず鳴っているが、蟬の声は少しとぎれる。おりおり生垣の外を、跣足(4)の子供が、「花柴(5)々々」と呼びながら、走つて通る。櫛(6)を売るのである。雨の歇(7)んでいる間は、ひどく蒸暑い。石田はこの夏中で一番暑い日のように感じた。翌日もやはり雨が降つたり止んだりして蒸暑い。夕方に町に出て見ると、どの家にも盆燈籠(8)が点してある。中には二階を開け放して、数十の大燈籠を天井に隙間(9)もなく懸けている家がある。長浜村まで出て見れば、盆踊が始まっている。浜の砂の上に大きな圈(10)を作つて踊る。男も女も、手拭の頬冠(11)をして、着物の裾を片折つて帯に挟んでいゝ。襪(12)はだしもあるが、多くは素足である。女で印絆(13)纏(14)に三尺帯を締めて、股引(15)を穿(16)かずにいるものもある。口々に口説(17)というものを歌つて、「えとさつさ」と囃(18)す。好いとさの訛(19)であろう。石田は暫く見ていて帰つた。

雛は日にまし大きくなる。初のうち油断なく庇(20)つていた親鳥も、大きくなるに連れて構わなくなる。石田は雛を畳の上に持つて来て米を遣る。段々馴れて手掌(21)に載せた米を啄(22)むようになる。また少し日が立つて、石田が役所から帰つて机の前に据わると、

庭に遊んでいたのが、走って縁に上つて来て、鶴嘴つるはしを使うような工合に首を *sagittale* の方向に規則正しく振り動かして、膝の傍そばに寄るようになる。石田は毎日役所から帰掛に、内が近くなると、雛の事を思い出すのである。

八月の末に、師団長は湯治場から帰られた。暑中休暇も残少なになった。二十九日には、土地のものが皆地藏様へ詣るといので、石田も寺町へ往つて見た。地藏堂の前に盆燈籠の破れたのを懸け並べて、その真中に砂を山のように盛つてある。男も女も、線香に火を附けたのを持って来て、それを砂に立てて置いて帰る。

中一日置いて三十一日には、また商人が債かかを取りに来る。石田が先月の通とおりに勘定をして見ると、米がやつぱり六月と同じように多く入っている。今月は風炉敷包を持ち出す婆あさんはいなかつたのである。石田は暫く考えて見たが、どうも春はお時婆あさんのような事をしそうにはない。そこで春を呼んで、米が少し余計に入るようだがどう思うと問うて見た。

(1) 女子が手芸に巧みになりたいと祈る祭の意。陰曆七月七日の夜に行う牽牛織女星の祭事。七夕祭。

(2) 陰曆の十、十一日に当る。(3) 梵語。甚だしい苦の意。七月十五日に種々の食物を祖先の靈に供

えて餓鬼に施し、祖先の冥福を祈り、その苦しみを救うこと。精霊会。(4) 「櫛かみを売る兒童花柴花柴と

叫びて街を走れり。今日は陰曆の七月十三日にして、盂蘭盆会に当れば、人家買いて仏に供するなるべし。」

〔小倉日記〕三十二年八月十八日(5) 踊り口説の略。くどき節の踊り歌。くどき節は長編の叙事的な

歌謡を同一曲節を反覆して歌うもの。盆踊りの多くは踊り口説で踊る。(6) 仏。矢のような。

春はくりくりした目で主人を見て笑っている。彼は米の多く入るのは当前だと思うのである。彼は多く入るわけを知っているのである。しかしそのわけを言つて好いかどうかと思つて、暫く考えている。

石田は春に面白い事を聞いた。それは別当の虎吉が、自分の米を主人の米櫃と一しょに入れて置くという事実である。虎吉の給料には食料が這入っている。馬糧ばりょうなんぞは余り馬を使わない司令部勤務をしているのに、定則だけの金を馬糧屋に払っているのだから虎吉が随分利益を見ているということ、石田は知つている。しかし馬うまさえ瘦やせさせなければ好いいと思つて、あなぐろうとはいしない。そうしてあるのに、虎吉が主人の米櫃に米を入れて置くことにして、勝手に量り出して食うというに至つては、石田といえども驚かざることを得ない。虎吉は米櫃の中へ、米をいくら入れるか、何遍入れるか少しも分らないのである。そうして置いて、量り出す時にはいくらでも勝手に量り出すのである。段々春の云うのを聞いて見れば、味噌も醤油も同じ方法で食つている。内で漬ける漬物も、虎吉が「この大きい分は己おれの茄子だ」と云つて出して食うということである。虎吉は食料は食料で取つて、實際食う物は主人の物を食つているのである。春は笑つてこう云つた。割木わりきぎも別当さんのは「見せ割木せりん」<sup>(3)</sup>で、いつまで立つても減ることはないと云つた。勝手道具もそうである。土間に二つ置いてある。春の来た時に別当が、「壊われているのは旦那ので、満足なのは己おれのだ」と云つた。

その内に壊れたのが丸で使えなくなつたので、春は別当と同じ七釐で物を煮る。別当は「旦那の事だから貸して上げるが、手めえはお辞儀をして使え」と云つていゝといふことである。

石田は始て目の開いたような心持がした。そして別当の手腕に対して、少からぬ敬意を表せざることを得なかつた。

石田は鶏の事と卵の事とを知つていた。知つて黙許していた。然るに鶏と卵とばかりではない。別当には *systematiquement* に發展させた、一種の面白い経理法があつて、それを万事に適用してゐるのである。鶏を一しよに飼つて、生んだ卵を皆自分で食うのは、ただこの *systeme* を鶏に適用したに過ぎない。

石田はこう思つて、覚えす微笑んだ。春が、もし自分のこんな話をしたことが、別当に知れては困るといふのを、石田はなだめて、心配するには及ばないと云つた。

石田は翌日米櫃やら、漬物桶やら、七釐やら、いろいろなものを島村に買い集めさせた。そして虎吉を呼んで、これまでであつた道具を、米櫃には米の這入つてゐるまま、漬物桶には漬物の這入つてゐるまま、みんな遣つて、平氣な顔をしてこう云つた。

(1) あなぐる。さぐる、せんさくする。

(2) 縦に割つて細くした薪。関西方言。

(3) 見せて置く

ばかりで実際には使わない薪。

(4) (仏)。系統的に。故意に。順序正しく。

(5) 経営処理方法。

(6) (仏)。説。形式。系統。

(7) 九月一日に当る。



「これまで米だの何だのが、お前のと一しよになつていたそうだが、あれは己おれが気が附かなかつたのだ。己は新しい道具を買つたから、これまでの道具はお前に遣る。まだこの外にもお前の物が台所にまぎれ込んでゐるなら、遠慮をせずに皆持つて行つてくれい。それから鶏どりが四五羽いるが、あれは皆お前に遣るから、食うとも売るとも、勝手にするが好いい。」

虎吉は呆あきれたような顔をして、石田の云うことを聞いていて、石田の詞ことばが切れると、何か云いそうにした。石田はそれを言わせずにこう云つた。

「いや。お前の都合はあるかも知れないが、己おれはそう極めたのだから、お前の話を聞かなくても好いい。」

石田はついと立つて奥に這入つた。虎吉は春に、「旦那からお暇が出たのだかどうだか、伺つてくれる」と頼んだ。石田は笑つて、「己おれはそんな事は云わなかつたと云え」と云つた。

その晩は二十六夜待まちだといふので、旭町で花火はなびが上がる。石田は表側の縁えりに立つて、百日紅の薄黒い花の上で、花火の散るのを見てゐる。そこへ春はるが来て、こう云つた。

「今別当さんが鶏どりを縛むすつて持つて行きよります。雛ひよこは置おこうかと云いますが、置けと云いまつしょうか。」

「雛ひよこなんぞは入らんと云え。」

石田はやはり花火を見ていた。

(明治四十二年八月)

(1) 民間信仰の一種。俗に十三夜待、十七夜待、二十三夜待、二十六夜待などと称して行われる祭祀風俗。「まち」は祭と同義。近世まで深夜、男女が嬉戯する風習が地方に行われた。

表記について

本書は、『文庫版 森鷗外全集』（筑摩書房 一九九五・六く九六・八）を底本としました。

- 「鶏」 『森鷗外全集1 舞姫／キタ・セクスアリス』（筑摩書房 一九九五・六）
- 「独身」 『森鷗外全集2 普請中／青年』（筑摩書房 一九九五・七）
- 「二人の友」 『森鷗外全集4 雁／阿部一族』（筑摩書房 一九九五・九）
- 「小倉日記」 『森鷗外全集13 独逸日記／小倉日記』（筑摩書房 一九九六・七）

作品中には、今日の観点からすれば不適当な表現がありますが、作品の持つ文学性、芸術性及び時代背景、ならびに著者が故人であることを考慮してそのままとしました。

北九州市立文学館文庫◇

平成25年3月26日発行

著者 森 鷗外

発行 北九州市立文学館

〒803-0813 北九州市小倉北区城内4-1

Tel (093) 571-1505

Fax (093) 571-1525

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

1208128A

北九州市立文学館文庫 7



北九州市立  
文学館

Kitakyushu  
Literature Museum